

中国「紀年」詩考(II)

——六朝から盛唐まで——

塩 見 邦 彦

はじめに

人間の一生の中で、夫々の節目の儀式を伴うものといえば、大きく分けて、誕生・結婚・死の三者と言えるであろう。この内、誕生は我々個々人の記憶にはまらずないであろう。結婚が人生をポジティブに捉えようとする、いわばハイライトであるのに対し、死は人生の終焉であるが故に、その対極にあるものであると言えよう。

換言すれば、我々は誕生・結婚・死という三つの節目をくり返すことによって、人生という劇場を形造っている、とも言える存在である。しかも、人間以外の他の動植物のような、同じこの世に生を享けているものと截然と区別できるのは、死というものに対し、あらかじめ考えたり想像したりしながら生きている存在である、ということである。動物は死期が近づくと身を隠すという習性があることは知られているが、彼らが人間のように、何十年も前から、自らの死というものに思いをめぐらすなどということは、ちょっと考えられないから、人間のみが多くは日々の生活の中で生死を見つめ、それに自ら意識的に向き合っているということである。それ故、当然のように、人生をいかに生きるべきかという考え方は、古来から洋の東西を問わずくり返されてきたし、現在でもなお極めて現代的な課題のひとつと言ってよい。

それは、中国についても同じことが言える。が、中国には更に、年をとればとる程、成熟した人格者とみなす、い

わば年齢と共に人格も成長するという考え方が古くからあり、その逆に、若さは未熟と同義語的に解釈されてきた。そのごく近い例を示すならば、林語堂（一八九五—一九七六）の『人生をいかに生きるか』では、以下のように述べられている。

中国では、公用で人を呼んで、その姓名をきいてから最初に尋ねることは、「ご年齢は？」

ということである。そのとき相手が、二十三歳ですとか、二十八歳ですとかいって、何かいいにくそうに返答をすると、尋ねたほうはたいいてい相手をなぐさめ、まだまだ輝かしい将来がおありだし、いつかは老人になれますから、などという。またもし、三十五歳とか三十八歳とか答えるならば、深い尊敬をもって、「おめでとう」とすぐいう。高齢を告げれば告げるほど、尋ねるほうはまじめになる。そして五十何歳とでもいおうものなら、尋ねるほうはたちまち声を落とし、懇慫に尊敬の態度をしめす。年とった人々が、できることなら中国に行つて住みたいと願うのはこれゆえであつて、中国では白髯しろひげの乞食でさえ特別親切に扱われるのである。⁽¹⁾

右の一節には、中国の人々が長い歴史の間に会得した、人生や年齢に対する一つの解答がある、と言えるのであるが、時代的に見れば、古く春秋期から六朝期にかけての詩の中に、既にそれらの原型を見い出すことができる。

いま、直接中国人の「紀年」詩を考える前に、中国の人々にとって、人生とは如何なるものとして捉えられてきたのかを見ておくことも無駄ではなからう。

一、中国人の人生観

古く『詩經』においては、人生をはかないもの、無常なるもの、として扱っている扱え方よりも、月日の経過の早

いことを嘆く歌がまず存在する。

今我不樂 今 我樂しまずんば

日月其除 日月 其れ除らむ

(唐風「蟋蟀」)

今者不樂 今にして樂しまずんば

逝者其盡 逝くゆく其れ盡ひなむ

(秦風「車鄰」)

唐風の「蟋蟀」では、年末が近づくことへの焦燥感が詠われ、秦風の「車鄰」では、年を重ねて老いてゆくことへの不安が詠われているものの、人生がはかないもの、という感覚はまだ現れていない、と言ってよい。しかし、次みる南方の文学『楚辞』においては、はかない人生に対する歎きが、確かに存在するように詠われる。

日月忽其不淹兮 日月忽として其れ淹しからず

春與秋其代序 春と秋と其れ代序す

惟草木之零落兮 草木の零落するを惟ひ

恐美人之遲暮 美人の遲暮するを恐る

(楚辞「離騷」)

右の詩句には、日月の経過と共に、美人(人間)も老いてゆくということへの恐れが率直に詠われていて、人生ははかないもの、とする考え方が吐露されているとみてよからう。この他にも『楚辞』には、人生のはかなさ、人生の無常さへの嘆きが詠われる個所が多く、『楚辞』の出現によって、中国の古代人は、人生に対するはかなさの感覚を持ち得たかに見える。

老冉冉其將至兮 老は冉冉として其れ將に至らんとし
恐脩名之不立 脩名の立たざらんことを恐る (楚辞「離騷」)

右のような南方の屈原による人生観は、少し降った『春秋左氏傳』でも、より人生そのものに対する懷疑として表現される。

周詩有之、曰「俟河之清、人壽幾何」

周詩にこれ有り、曰く「河の清を俟つも人壽幾何ぞ」 (『左傳』襄公八年)

孝伯曰「人生幾何」

(孟) 孝伯曰く「人生幾何ぞ」 (『左傳』襄公三十一年)

これら『左傳』に見られる「人生幾何ぞ」という表現には、『楚辞』における日月の経過に対する深い焦燥感が大きく影響していると考えることが可能であるし、「人生は……の如し」という六朝詩に多く現われる常套句へつながる視点が、既に内包されているとみてよからう。

さて、初めの『詩經』にもどると、人間の一生はたかだか百歳までだ、と把える考え方が既に次のように詠われている。

夏之日 夏の日

冬之夜 冬の夜

百歳之後 百歳の後

歸于其居 其の居はかに帰せん (唐風「葛生」)

これを更に、『楚辞』の人の一生ははかないもの、無常なるもの、とする考え方と共に詠いあげたものが、古詩十九首や漢魏の詩人達の詩であった。

生年不滿百 生年は百に満たず
常懷千歲憂 常に千歳の憂を懐いだく (古詩十九首 其十五)

人生不滿百 人生は百に満たず
戚戚少歡娛 戚々として歡娛少し (曹植 遊仙詩)

人生樂長久 人生は長久を樂ながうも
百年自言遼 百年は自ら遼なりと言ふ (阮籍 詠懷詩八十二首 其八十一)

これらの詩には、人の一生(「人生」)を文字通りの「人生」とるよりも、ここで詠われる「人生」という言葉は、「人の生命いのち」という意味にウエイトが置かれていよう)は、せいぜい長く生きたとしても百歳までだ、とする発想がその根柢に有り、それが『楚辞』的な人生無常なるものという感懐と結びつき、定着してゆく過程を現わしているように思われる。と同時にまた、「人生は……の如し」という思考パターンも漢魏の詩人達が好んだ詠い方であった。

人生天地間 人生は天地の間
忽如遠行客 忽あたかも遠行の客の如し (古詩十九首 其三)

中国「紀年」詩考(四) 一六朝から盛唐まで一

人生忽如寄 人生は忽も寄あとかするが如く

壽無金石固 寿は金石の固きこと無し

(古詩十九首 其十三)

右に詩には「忽如」(あたかも……のようだ)という表現で、人生をこの世に仮に生を享けたもの、として詠うことで、人間の一生のはかなさをより強く詠嘆する詠い方として定着していったとみる見方も許されよう。しかし又、ここで指摘したいのは、漢魏の詩人達に多用された「人生は……の如し」という措辞は、時代が降るにつれて使用されなくなるといふ事実である。恐らくそれは、六朝期も中期以降になると、詩人達が人生そのものよりも、細やかな個々の生活や状況を詠うようになっていったことの、ひとつの反映であるように思われる。

それはともかく、漢魏の詩人達にとって、人生とはこの世に「寄る」ようなものであり、「朝露」のようなものであり、更にまた「飄塵」でもあって、瞬時に消え去る運命の謂であった。このパターンは以降の、唐以後の詩人達の常套手段ともくりかえし詠われる表現として定着する。そして、それらはかない人生に対し、如何に対処すればよいかを追求した結論が、例えば、

爲樂當及時 樂を為すはまよ時に及ぶべし

何能待來茲 何ぞ能く來茲を待たん

(古詩十九首 其十五)

等に詠われる人生の楽しみ方とも言うべき対処の仕方であった^③。

以上、『楚辭』『古詩十九首』などから、中国人の「人生」観は、この世に生を享けた人間が、人生をどのようなものとして捉え、それに対してどのように対処しようとしたのかの一端をみてきた。このような人生観は、当然の如く六朝から唐代へ至る詩人達にも影響を与えているのであるが、その影響の下で詠われながらも、六朝は六朝の詩人らしく、また、唐代は唐代の詩人らしく、少し感情をアレンジしながら人生観を詠うように思われる。以下に「紀年」

詩に限って、それらの詠い方をみてみよう。

二、六朝の「紀年」詩

既に、中国各時代の「紀年」詩の特色については、そのいくつかについて述べたことがあるが、この章では六朝期の「紀年」詩についてやゝ詳しくその内容をみてみよう。

『中国「紀年」詩考(1)』でも既に述べたが、六朝期における「紀年」詩は、そう多くは存在しない。だがその中であって最も多い詩人はと言えば陶淵明(三六五—四二七)であることも記した。まず、陶淵明以外の人物による「紀年」詩を見た上で、あらためて陶淵明のそれを考えることとしたい。

陶淵明以外で挙げるとすれば、陰鏗(？—五六五?)の次の詩であろう。

大江一浩蕩 大江一に浩蕩たり

離悲足幾重 離悲 幾重に足る

潮落猶如蓋 潮落は猶蓋の如くなるも

雲昏不作峯 雲昏く峯を作さず

遠戍唯聞鼓 遠戍は唯だ鼓を聞くのみにして

寒山但見松 寒山には但だ松を見るのみ

九十方稱半 九十の方に半と称し

歸途詎有蹤 歸途詎んぞ蹤有らんや

(晩出新亭 陳詩卷一)

陰鏗は字を子堅といい、武威姑臧(現甘肅武威)の人物で梁代に參軍に任ぜられ、陳に入って晉陵太守になった人

物らしいが、彼の詩が嘗て何遜（四六六？—五一九？）と名を斉しくしたことは、杜甫詩「解悶」にも「頗る陰何を学び、心を用ひるに苦しむ」（其七）と詠われていることから、その一斑はうかがえよう。

彼はまず最初の四句で、蕩々と流れる長江を詠い出し、一気に遠くの戦いから、寒々とした松へと視点を移す。それはとりもなおさず戦鼓（聴覚）から松樹（視覚）への変化であり、陰鏗の心象風景でもあろう。というのも最後の聯で、四十五歳になってやっと都に帰れる自己をボツンと詠っているからである。この詩からは決して華やかな風景は浮かんでこないし、まして四十五歳になって都に帰れる喜びも詠われてはいない。（余談になるが、このような悲哀の感情が、あるいは杜甫と肌が合ったのかもしれない。）

大江—遠戍—寒松—自己と点描される視点は、大きなものから小さなものへと周囲の風景を収斂させながら、自己の存在を客観的にみつめている「さめた眼」とも言える視点が浮かんでくる。

それに比べると、以下の陶淵明の詩は、陰鏗のそれとは全く異なる世界の「紀年」詩として位置づけられるように思われる。

まず淵明自身は、自分自身の死をどのように扱っていたのか、ということと、彼自身が語っていると思われる擬挽歌詩を見ることでみてみよう。この「挽歌詩」は、自分の「死」を前にして詠ったものではなく、むしろ自分の「死」を想定して、一度そのような状況に自分を置いて、というよりそれをつき放してみることで、現在の自分がより鮮明に浮びあがるのではないか、と思って詠った作品のようであるが（事実、阮瑀、繆襲、陸機といった詩人にも「挽歌」があり、宴会で好んで唱われた形跡がある）、それは次のように詠われる。（以下の訓みは全て斯波六郎著『陶淵明詩譯注』東門書房に従った。）

有生必有死 生あれば必ず死あり

早終非命促 早終すとも命の促まれるに非ず

昨暮同爲人 昨暮には同じく人なりしに

今日在鬼録 今旦けきはも鬼録にぞ在る

魂氣散何之 魂氣たましひ 散りて何くにか之ける

枯形寄空木 枯形なまがらは空木からぎに寄れり

嬌兒索父啼 嬌兒いとこは父を索さがして啼なきさけひ

良友撫我哭 良友ともだちは我を撫なでつつ哭なきく

得失不復知 得失うすてに知らず

是非安能覺 是非 安んぞ能く覺さらんや

千秋萬歲後 千秋 万歳の後

誰知榮與辱 誰か知らん 榮と辱とを

但恨在世時 ただ恨むらくは、世に在りし時

飲酒不得足 酒を飲みて足るを得ざりしを

(擬挽歌詩 其一)

陶淵明自身が一番言いたいことは、最後の「死んで後、千年万年を経過すれば、私の恥辱も榮譽も問題ではない。心残りはこの世で酒がぞんぶんに飲めなかったことだ」という四句にあることは言うまでもない。自分(人間)は「必ず死ぬべき運命にあり、若死にしたからと言って寿命がちぢまった訳でもあるまい」とうそぶく陶淵明という人物は、意外とクールな精神の持ち主であったらしい。その彼が、六朝詩人の中で最多の「紀年」詩を残していることは、これ又特筆されてしかるべき事柄のように思われる。淵明にとって人間の死とは、先程引用した詩句にもあるように「生あれば必ず死ある」ものとしてのそれであった。しかし、彼も当時の儒家的な思考の範疇からは逃れられなかった。というよりも、儒家的な範疇は範疇として、自己自身を一度「死」という重いテーマと向かい合わずにはおれないものがあつたと見た方がいいだろう。そうでなければ三十、四十、五十と、いわば人生の節目節目に詩を詠むなどということがあつたらうか。

これも既に指摘したが、『論語』為政篇の「吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」という一条と照し合せてみると、淵明自身がたえず立ち返りつゝ、「死」を見つめたことのひとつの証明として詩を残したのではないか、とさえ思われてくる。まず三十に近い頃のことを後になつて思ひ出した詩。

疇昔苦長飢 疇昔 長に飢うるに苦しみ

投耒去學仕 耒を投げて去いて学仕へぬ

將養不得節 將養ふには節を得ず

凍餒固纏己 凍餒は固より己れに纏はれり

是時向立年 是の時 立年に向んとせしが

志意多所恥 志意 恥づる所多く

遂盡介然分 遂に介然の分を尽くして

拂衣歸田里 衣を払うて田里に帰りぬ

冉冉星氣流 冉冉として星氣流れ

亭亭復一紀 亭亭として復た一紀

世路廓悠悠 世路 廓くして悠悠たり

楊朱所以止 所以もや 楊朱の止まりしは

雖無揮金事 金を揮ふの事なけれども

濁酒聊可恃 濁酒 聊か恃む可けん

(飲酒二十首 其十九)

恐らく右の詩は、過ぎにし日々の苦しい生活に憶いを馳せながら、四十を少し過ぎてからの詩と思われるが(詩中

に「亭亭復一紀」の句があり、一紀は一般には十二年を指していることから、「志意恥づる所多し」と詠うように、本来あるべき姿に照らして恥しく思う所が多かった模様である。そう言えば彼は四十歳の時の詩でも、その一・二句で「運生は會ず歸に盡く、終古に之を然りと謂ふ」と言いながら 最後の四句で次のように詠う。

自我抱茲獨 我れ茲の独を抱いてより

僂俛四十年 僂俛なること四十年

形骸久已化 形骸は久已に化れるも

心在復何言 心 在り復も何をか言はんや

(連雨獨飲)

この「獨」について斯波氏は「獨は内省した自己を指す」と指摘される。「人間は死すべき運命を背負ってこの世に生まれてくるが、それはそれとして、肉体は衰えたりと言えども、酔境を楽しむ心はまだ衰えていないのだから、これ以上何をあくせくする必要があろうか」と、極めて透徹した死生観で詠いおさめられている。このような彼が「雜詩十三首、其六」で詠う内容も次のような言葉で始まる。

昔聞長者言 昔は長者の言を聞くも

掩耳每不喜 耳を掩うて毎に喜ばざりき

奈何五十年 奈何ぞや 五十の年

忽已親此事 忽已ちにして此の事を親せんとは

と、嘗て老人達がした事を五十歳にもなってみると、同じことをしている自分に気づき恥しく感じている自分を描く。そして最後の二句で「子あれども金を留めじ、何ぞなさん身後の置ひを」と、子供達に財産を残さず、死後のこ

とまで思い煩うことはすまい、と詠いおさめる。ここには、人間の一生は、ただ推移してゆく時間によってのみ流れているという訳ではなく、その上に夫々の人生は統一性をもったものでも、合理的なものでもなく、ある時には停滞したり、又ある時には何かによって方向をも変えるものだ、という一種の諦念にも似た、陰鏗とはまた別の「さめた眼」があることを物語っていよう。そんな彼が、ある時、次のように詠う。

開歳倏五日 開歳ひらけけて倏たちち五日

吾生行歸休 吾われが生いのち 行ゆくく歸休ききゅうす

念之動中懷 念ねん之をし念ねんへば中懷ちゅうわい動き

及辰爲茲遊 辰とちに及およんで茲こゝの遊あそびをなす

(遊斜川并序)

正月の五日。それはまだ誰もが新しい歳の喜びに酔いしれている時に、彼は自分がいづれは死を迎えるのだ、という念いからられ、その念いとらわれると自分自身どうしようもなくこの斜川へ遊びにきたのだ、と詠う淵明の胸中には、はたしてどんな念いが渦巻いていたのだろうか。ここには実に素直な、人生(死)と対峙している陶淵明がいる。

五十歳の四年後、彼は更に紀年を詠み込んだ詩を、もう一首残している。「怨詩楚調、龐主簿遺・鄧治中に示す」がそれである。

天道幽且遠 天道は幽かすかにして且かつつ遠とほく

鬼神茫昧然 鬼神は茫昧まうまい然なり

結髮念善事 結髮くつぱつより善事ぜんじを念おもひ

僂俛六九年 僂俛くゑんして六九ろくじゅうの年としなり

と最初の四句で「天道」や「鬼神」についてはよく判らぬが、それでも若い頃からこの五十四歳まで善行に励んできた、と今までの自己の思索をふり返りつゝ、その後の句で最初の妻を亡くしたこと、及び天変地異の理不尽さを詠う。そして最後の四句で死後の名声など浮雲の如しだ、と言下に否定している。

吁嗟身後名 吁嗟 身後の名

于我若浮煙 我れに于ては浮かべる煙の若し

慷慨獨悲歌 慷慨して独り悲歌す

鍾期信爲賢 鍾期 信に賢なりと爲す

ここで淵明は『論語』述而篇の「不義にして富み且つ貴きは、我れに於て浮雲の如し」をふまえてはいるが、儒家的な範疇から大きくはみ出ていることを確認できるであろう。このような姿勢は六朝詩人の中で極めてまれであること、つまり彼の詩が一般的には田園詩として位置づけられてきた従来の文学観からは特異なものと言えようが、実は以上見てきた如く、彼は六朝詩人の中で、最も鋭く「死」と対峙した詩人として位置づけられるように思われる。入矢氏も「『死』を主題とした詩を作った詩人としては、中国では最初の人ではなからうかと思ひます」と指摘されるが、陶詩には「死」を詠みこんだ詩が多い。そこには自己の年齢を詩に詠みこむことで、その時々自己と「死」とを対峙させるポジティブな念いがあり、他の六朝詩人には見られない特色があると思われる。しかもそこで扱われる「死」とは、年齢を重ねたり、病患などの故に仕方なく迎える「死」についてでなく、常に「生」の意味を問いつゝ対峙する「死」についてであり、そうすることによって自ら内奥に湧き出づる、いわば淵明の魂の苦悶の中から詩が詠われている所に、彼の詩の深さや広がりがあるように思われる。

このような陶詩の精神は、では唐代以降、どのように詩人たちに受けつがれていったのであろうか。

三、初盛唐期の「紀年」詩

まず、初盛唐期の詩人たちの「紀年」詩に於て目立つ特色は、第一に『論語』為政篇の影響が存外に少ないということである。恐らくそこには六朝期の影響が色こく反映していることと関係があると思われるが、三十・四十等の夫々の人生の節目で詠われる詩が、唐代全体を通じて圧倒的に多いことに対しても奇妙な現象ではある。換言すれば、『論語』為政篇の条にしばられずに詠われる詩は、中唐の白居易を待たずに詠われ始めていた、ということである。第二に、初盛唐期で自己の詩の中に年齢を詠う詩人は岑參、杜甫の二者に限られ、殊に杜甫が抜きんでている、というのがその特色である。第三に、中唐以降に現れる除夜とか元旦といった、いわば人生に於て誰もが感ずる或る種の感慨のような場面設定で詠われる詩は、まだ現われないということである。少し先取りを言うなら、宋代も後半になるとこの傾向が強まり、「紀年」詩は誕生日（生日）か除夜（除夕）か元旦のいづれかで詠われるパターンが定着するが、この時期ではまだこのようなパターン化からまぬがれているということができよう。

以上、三点の特色はごく大雑把に見てのことに過ぎない。以下、岑參、杜甫の「紀年」詩を具体的に見てみよう。調査によれば二人の詩は四十・五十の夫々十年毎の節目の年に「紀年」詩を残している。これは一見何でもないように思われる現象であるが、中唐以降の詩人たちから見れば、このような詠われ方は極めて特殊であり、後には白居易の如く、毎年詠う詩人も現われ、それが一般的な傾向になってゆく。つまりこの時期も六朝期と同じく『論語』の影響から脱却しつゝ、「紀年」を詠うという独自の姿勢が強くなるとも言えよう。そのような見方が許されるなら、次の岑參（七一五？―七七〇）の詩は四十歳を詠ってはいいるが、『論語』の意識は極めて薄いとみてよからう。

雁塞通鹽澤 雁塞は塩沢に通じ

龍堆接醋溝 龍堆は醋溝に接す

狐城北北畔 狐城 天北の畔ほとり

絶域海西頭 絶域 海西の頭（はまろ）

秋雪春仍下 秋雪は春に仍（な）ほ下り

朝風夜不休 朝風は夜も休（や）まず

可知年四十 知るべし 年四十なるも

猶自未封侯 猶（な）自未だ侯に封ぜられざるを

（北庭作）

詩題にある「北庭」とは「北庭都護府」を指し、そこは現在の新疆ウイグル自治区迪化県にあった。この詩は、彼がこの地方に赴任していた時の作。長安を遠く離れ、見るもの聞くもの全てが未知の異郷の風土の中で、自己自身のみ、當時の長安の人々が見聞きすることのなかった地名を大胆に詩中に使用することで、異郷にある自分を納得させ、胸甲斐なさを嘆いたものと言えよう。雁塞（庭州地方か、不明）、塩沢（蒲昌海）、龍堆（白龍堆砂漠）、醋溝（酸水）との四句でたゞならぬ自然や孤絶した北庭地方を詠う。最後の二句は最初の二句と対応しながら、四十歳にもなっても出世できない自分を嘲笑することで己自身をなぐさめるといふ構造をもつ。実際に岑参がこの詩を四十歳（とすれば卒年から推定して天寶十四年（七五五）の作ということになる）の時に作ったとすれば、『論語』でいう「不惑」の年という意識よりも、人生も半ばに近づいた自分の胸甲斐なさの方が、彼の頭の中を過（よ）った関心事であったと言えよう。彼は当時、安西節度使の下で北庭節度判官という官職であったはずで、都長安から遠く離れた異郷に在ったとは言え、決して低い官ではなかったはずである。しかし今、そのことはこれ以上深入りせず、岑参という詩人が『論語』の影響をあまり受けずに「紀年」詩を詠んでいることを確認しておきたい。

杜甫（七一二―七七〇）は唐代全体の中でも白居易に継ぐ「紀年」詩作家でもあるが、五十歳の時の作で、以下の如く詠う。

（一）百年已過半 百年已に半ばを過ぎ

秋至轉饑寒 秋至りて饑寒に転ず (因崔五侍御寄高彭州適)

(二) 百年嗟已半 百年 嗟あは已まに半ば (贈虞十五司馬)

四坐敢辭喧 四坐敢へて喧かまひしきを辞せんや

(三) 平生獨往願 平生 独往の願

惆悵年半百 惆悵として年半百なり (立秋後題)

(四) 相看過半百 相ひ看るに半百を過ぎるも

不寄一行書 一行の書も寄せず (寄高三十五詹事適)

(五) 百年秋已半 百年秋とせ已まに半ばに

九日意兼悲 九日 意は悲を兼ね (九日曲江)

(六) 五十白頭翁 五十 白頭の翁

南北逃世難 南北に世の難を逃る (逃難)

(七) 即今倏忽已五十 即今倏忽として已に五十

坐臥只多少行立 坐臥すること只だ多く行立少し (百憂集行)

(八) 年過半百不稱意 年は半百を過ぐも意に称かなはず

明日看雲還杖藜 明日も雲を看還た藜を杖つかむ

(暮歸)

(一)から(八)まで、いづれも五十歳ないしは五十歳前後の作とみてよいが、これらの詩句をみれば、後に確立するかの觀がある生日・晦日・元旦という誰もが己の年齢を意識するであろう日に、杜甫は作詩していないということが判る。つまり六朝以来の伝統が杜甫の詩についても言え、前述したような三条件はまだ確立していないと言える。第一に、杜甫における「紀年」詩の特色は、年齢そのもの、あるいは次第に年をとり、老いへと向うことに對する悲嘆を直接詠うというより、むしろ自己をとりまく情況を詠う中で、ハタと自分の年齢に思い至るといふ、いわば年齢そのものをモチーフとして正面から詠うタイプの詩人ではない、と言えるのではなからうか。換言すれば、日々老いてゆく人生に對して如何に年齢や老いを克服すべきか、などと大上段にかまえず、自己をとりまく微細な事柄の中に、さりげなく年齢を詠み込むといったタイプの詩人であったということである。例えば(三)では以下の如くである。

日月不相饒 日月は相ひ饒かならず

節序昨夜隔 節序は昨夜にて隔たる

玄蟬無停號 玄蟬は停号なく

秋燕已如客 秋燕は已に客の如し

平生獨往願 平生 独往の願

惆悵年半百 惆悵として年半百なり

罷官亦由人 官を罷むるは亦た人に由る

何事拘形役 何事ぞ形役に拘らむ

この詩では、まず詠われるのは人間をとりまく秩序としての「日月」であり「節序」である。続いて「玄蟬」や

「秋燕」もより人間に近い存在として点描されている。それら前半に点描された、人間をとりまくものに触発されて自己の年齢を省みた時、杜甫は五十歳に近くなった自分に思いを致すのである。(七)でもそれは同様である。

憶年十五心尚孩 憶ふ年十五のとき心は尚ほ孩こども

健如黄犢走復來 健なること黄犢の如く走りまた来る

庭前八月梨棗熟 庭前 八月 梨棗熟うれ

一日上樹能千回 一日樹に上ること能く千回なり

即今倏忽已五十 即今倏忽として已に五十

坐臥只多少行立 坐臥すること只だ多く行立少し

.....

前半の四句は王筠の詩、行路難の句「千門皆閉夜何央、百憂俱集斷人腸」に触発されて詠んだものであるが、まず若い少年の時の自分がどのようであったかを描き、続く二句で五十にもなって坐臥するのみの自己を詠う。清・施鴻保の『讀杜詩說』によれば、下句で「入門依舊四壁空」といっているのは、嚴武の幕中にいながら同僚と合わず、草堂に帰ったことを言っているとして、これは広徳二年杜甫五十三歳の作であるとす。しかし黄鶴説では上元二年杜甫五十歳の作としている。いま引用した「即今倏忽已五十」の句から推測しても、多分五十歳の時のものとしてよいであらう。

いま、二詩を挙げて杜甫が年齢を詩中に詠む場合、従来の『論語』の影響の少ないことを述べ、併せて年齢を正面から詠まずに、自己をとりまく微細な諸現象から、年齢にも思いを致すといったタイプの詩人であることを見た。しかし彼にもいきなり年齢を正面にすえて詠う詩が無い訳ではない。(一)や(六)がそれである。

百年已過半 百年已に半ばを過ぎ

秋至轉饑寒 秋に至りて饑寒に転ず

爲問彭州牧 爲に問ふ 彭州の牧に

何時救急難 何れの時にか急難を救はん

右の詩は高適に与えた詩で、清の浦起龍によれば、上元元年（七六〇）秋七月、杜甫四十九歳の作とする。浦起龍によれば「公蜀に入りて後、生計は全て（他）人に資す」とあるように、杜甫は困窮な自分を救ってくれるよう高適に訴えていて、安閑とした生活ではなかったらしい。二人の間には「交情老更親」（奉簡高三十五使君）とあるような、他人からは測り知れない、二人にのみわかる「交情」があったらしい。しかし、ここで注意したいのは、杜甫の年齢表現の措辞である。いまみた（一）の詩では「百年已半」であるが、（一）から（八）までの詩で「半百」「三例」「百年已半」三例と、五十歳を言うのに、文字通り「五十」を使用しているのは二例のみであって、他の詩人たち、韓愈、白居易、李諒、張祐、杜牧、司空圖といった唐代の詩人たちが、直接「五十」という措辞を詩中に使用するのに対し、杜甫は八例中「五十」というのは二例のみと、他の詩人達と際立った対照を見せている。勿論、平仄の関係から「半百」なり「百年已半」を使用したとも言えるが、唐代の詩人達の中で五十歳をいう場合、百歳の半ばというか、直接五十と表現するかは、語感の問題とも関連して微妙な問題である。「百年已半」ないし「半百」の表現をするのは韋莊、皎然、方干のみで、あとは「四十九年非」という、かの蘧伯玉の故事にちなむ措辞もあるが、他は全て「五十」という表現をとる。⁸⁾

考えるに、杜甫は「半百」なり「百年已半」なりの措辞を使用することで、文字通り五十歳という年齢を表現したかったのではなく、五十歳の時には「五十」と言い、五十歳に近いか、少し過ぎた年齢では「半百」なり「百年已半」という表現で厳密に区別したと考えられる。そのように見ると、（一）、（三）、（四）は夫々、四十九、四十八、四十七であるし、（二）、（五）、（八）は夫々、五十七、四十二、五十七と、⁹⁾ いづれも「五十」歳の時の作ではない。これは例えば白居易詩

の場合と比べて際立った厳密さと言えよう。白居易は「寄山僧」で「眼看過半百、早晚掃巖扉」と「半百」の措辞を使い五十歳の時の作であるのに対し、「仲夏齋戒月」詩で「我今過半百、氣衰神不全」では五十三歳を指す場合もあるように、杜詩に比べてあいまいさが残る。ここにも杜甫の細やかな配慮を見てとることができよう。

杜詩で更に一つ注目すべき事柄が存在する。彼は「人生七十古來稀」（曲江一首、其二）という有名な句を残しているが、この「古稀」の典故となった句は、どうやら当時の諺のようなものを杜甫が自分の詩で使用したことにより、多くの詩人の慣用句になったらしいということである。

白居易は中唐の詩人であるが、彼の詩の中に次のような句が存在する。

古人亦有言 古人に亦た言あり

浮世七十稀 浮世 七十稀なり (覽鏡喜老)

舊語相傳聊自慰 旧語に相ひ伝ふ聊か自ら慰む

世間七十老人稀 世間 七十 老人稀なり (感秋詠意)

勿論、白居易は杜甫よりも後人であり、ここで言う「古人」も杜甫その人を指すと言われればそれまでだが、「旧語に相ひ伝ふ」というのは、そこに古来多くの人々によって伝えられてきたというニュアンスがこめられているように、次の宋代文瑩『玉壺清話』では、明確に「諺に謂はく」とそれを表現している。

梁王徐知諤は温の少子なり。……平日嘗て親しき所に謂ひて曰はく、諺に謂はく「人生百歳、七十なる者稀なり」と。(『玉壺清話』卷第九 李先主傳)

右の話柄も、唐代よりも後代のもの、と言えばそれまでであるが、杜甫の生きた盛唐期にも諺として存在し、それを杜甫が詩中で使用したと見る方が、より自然なことのように思われる。

以上、六朝期から盛唐期までの「紀年」詩を見ながら、それぞれの特色について気づいたことを述べた。しかし唐代の「紀年」詩は以上にとどまらない。いづれ稿を改めて他の問題についても論究したい。

註

- (1) 『人生をいかに生きるか』下(林語堂著 阪本勝訳 講談社学術文庫52頁―53頁)。
- (2) 索引類で検索すると以下の詩には全く現れない。『齊詩』『北齊詩』『北魏詩』『陳詩』。
- (3) 第一章を書くに当り参考としたものに、鈴木修次著『中国文学と日本文学』九「無常」考(東京書籍、昭和五十三年)及び、長谷川滋成著『詩語の発想―「人生」表現の場合―』(『汲古』第17号)。
- (4) 中国「紀年」詩考(1)(鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学) 第42巻第2号)。
- (5) 註(4)に同じ。
- (6) 斯波六郎著『陶淵明詩譯注』(東門書房 昭和二十六年)二〇六頁。
- (7) 入矢義高著『空花集』(思文閣出版 平成四年)一〇頁。
- (8) 白居易詩以外のものを挙げると、
酸寒溧陽尉、五十幾何毫(韓愈 薦士)
首開三百六旬日、新知四十九年非(李諒 蘇州元日郡齋…)
笑向春風初五十、敢見知命且知非(杜牧 歲旦朝回口號)
閒身事少只題詩、五十今來覺陡衰(司空圖 五十)
新年過半百、猶歎未休兵(韋莊 蠶白)
非通非介人、誰論四十九(黃滔 寓言)

人生百年我過半、天生才定不可換（皎然 寓言）

修持百法過半百、日往月來心更堅（方干 題龜山穆上人院）

(9) 仇兆鰲『杜少陵集詳註』による。

(10) 朱金城『白居易集箋校』による。